

チリ・パタゴニア1968-69 —ある学生探検の記録

第5回

# ウェリントン島の探検

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学, 地球環境学)



イラスト=安成 晶

この連載は、現在の私ではなく、35年前に学生だった私の書いた記録である。当時、京都大学探検部に所属する学生であった私は、仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち、そして2年近くを費やして1968年によく実現した。帰国後、私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた。内容は、探検の思い立ちから帰国まで、私たちは何をやり、何を見聞きし、そして何を考えたかを、あくまで私自身を通して記したものであるが、いくつかの不運が重なり、結局、そのまま35年間、眠り続けることになってしまった。今回、1960年代末の学生による「探検」の記録として、ほとんどそ

のまま『科学』に、十数回に分割して掲載していただくことになった。

前回(第4回, 7月号)は、現地での基地となったプエルト・エデンからさっそく、日本から持参したモーターボート「きょうと」号による氷河地域への偵察行に出発したが、エンジン故障のため、フィヨルドの中で漂流しつつ必死でボートを漕いで、ようやく無人島にたどり着き、救助された顛末を報告した。結局予定の大幅変更を迫られることになったが、今回は、その合間に行った、ウェリントン島内部の山と湖の短い踏査と、プエルト・エデンの入り江にひっそりと暮らす人たちについて、報告する。

## プエルト・エデン付近の探検

12月23日。今日もまた快晴だ。1年中、雨と風の絶えないはずが、このバカ陽気はどうだ。もう5日も晴天が続いている。空軍ポストで、4年間も気象観測と通信にたずさわってきたトロー氏も、まったく異常だという。が、とにかく好天は使わねば損だ。

ぼくは、エデンから約2km北にある、1つの尾根に、六甲隊の岩田修二君\*1と2人で登ってみることにした。

右手に、静かなエデンの入江(図2)とメシエル

水道をながめながら、かん木林と、白骨林(自然発生の山火事によって焼かれ、幹や大枝だけが枯れて、魚骨のように残った木の林)をぬう。やがて、苔でおおわれた原っぱに出る。湿潤なチリ・パタゴニアは、地表に土はほとんど見あたらない。樹木や草の生えないところは、苔など地衣類せん苔類がおおっている。晴天が続いているせいか、苔もやや、ひからびた感じだ。ところどころ、くぼんだところはじゅくじゅくしており、時には、長ぐつも隠れるほど、ズボツともぐる。草地はガラガラと緩傾斜で登っている。やがて、1つの大きな尾根のすそ野をまわり込み、幅10mほどの川につきあたる。この谷の奥には、地図を見ると、奥行2kmほどの細長い湖がある。川は、ぼくた

\*1 当時明治大学文学部学生。現在東京都立大学教授(自然地理学)。





- × 1300 m 峰  
 ▲ 針のような怪峰  
 L 調査した湖  
 --- 踏路

図1—チリ ウェリントン島 プエルト・エデン付近の地図。

ちのところで、1つの滝となって下へ落ちていた。まったく美しい滝だ。10 m ほど、ゆるく滑滝になっており、その先は、また 10 m ほどストンと、垂直に落ちている。滝から下流部分は、急激に高度が下がっており、平坦地の森林の中を、川がぐねぐねと蛇行しながら、海へ流れ込んでいく光景が、眼下に展開している。川を渡り、目的の尾根に取りつく。あらかじめ森林の幅の一番短かそうなどところを見定め、森に飛びこむ。巨大な、高さ 20 m はあろうかというコイウエ<sup>\*2</sup>が空をおおい、急にうす暗くなる。倒木が行く手をはばむ。かん木類と大きなシダがその間に密生している。シダの中には、背丈近いものもある。高湿度のため、やはり苔がびっしり地表や倒木をおおっている。長ぐつが、厚い腐蝕物にめり込む。湿潤亜寒帯林特有の様相だ。トゲのある下生えの草に悩まされる。見通しがまったくきかず、右往左往しながらも、やがて地衣類とまばらなかん木の地帯に脱け出た。かん木は、ロブレ<sup>\*3</sup>を、ちょうど這い松のような耐雪形態にしたものでニエレという。尾根は、急傾斜と平坦地が交互に、大きく階段状にあがっていく。ところどころに出ている露岩には、氷河の擦痕が残っている。自然地理専攻の岩田君

<sup>\*2</sup> 南極ブナの一様、Coihue(Nothofagus dombery)。チリパタゴニアで最も卓越している樹種。葉は細長く、大木となる。

<sup>\*3</sup> 南極ブナの一様、Roble(Nothofagus glauca)。コイウエに較べ、葉はやや小さくて丸い。



図2—プエルト・エデンの入り江の風景。

は、クリノメーターで、擦痕の方向を測る。標高約 600 m のこの付近も、かつては氷河におおわれていた。眼下に見えるメシエル水道には大氷河が流れていたのだろう。やがて、東方、メシエル水道のむこうには、パタゴニア南氷陸の雪原が見えだした。この尾根の北には、3つの、雪をかぶったピークを持った、大きなドーム状の山が、どっかと腰をすえている。高さは 1500 m 位か。900 m 以上は万年雪におおわれ、南斜面には、クレバスと蒼氷をのぞかせた、懸垂氷河を持っている。氷河の末端からは、数百 m の絶壁がおちている。下は、お釜のような深い盆地となっており、底には、湖がある。氷河のとけた水は、その絶壁を、3本の滝となって湖におちている。それにしても、深い釜底のような地形は、いかにしてできたのだろうか。この「お釜地形」は、その後も、たびたび出合った。

## 軽石の謎

ところで、エデンのゴンザレス先生が、ぼくたちに、軽石を見せてくれたことがあった。プエルト・エデンから約 20 km 北にある、メシエル水道の難所、イギリス海峡で拾ったという。その付近には、たくさんあるともいう。とすれば、この付近に火山があるはずだ。1つの説として、ぼくたちは、イギリスの登山家、探検家のエリック・シプトンの話を思い出した。シプトンは、1962 年、パタゴニア南氷陸を、60 日間かかって、縦断した。その途中、ラウタロ山(約 3400 m)付近で、風にのって、この山の方向から、強いイオウのにおいがしたと記している。これによって、





図3——ウエリントン島で発見した針のような怪峰。

シプトンはラウタロを活火山だろうと推察している。とすると、軽石は、この山から由来したことになる。もうひとつの可能性は、今ほくたちが見ている、3つのピークの山だ。そういえば、1つのピークの頂きは平らになり、火口があるかと思わせる。イングレス海峡は、この山の北東、すぐのところだ。この説の方が、軽石の説明としては納得がいく。ラウタロ山を火山としても、直接イングレスに軽石が運ばれるような氷河や川はない。エイレ・フィヨルドへ流され、水道をぐるっと南から北へ回るようにやってくるか、アルゼンチン側の湖をへて、分水嶺をつきぬくパスクワ河を通して太平洋に出、メシエル水道を南下するという「大旅行」を考えねばならぬからだ。が、どちらにしろ、校長先生の軽石は「大発見」ともいえる。チリの地質学者の間では、南緯 45° 付近のプエルト・アイセン以南には、地質構造から「火山なし」とされているのだ。

その後、この「問題」の山には、六甲隊が登頂をくわだてたが、取り付けの尾根に至るまでの密林に時間をとられ、果せなかった。登頂しなくとも、露岩地帯まででも達していたら、火山か否かの証拠がつかめていたかもしれない。

### 怪峰の発見

やがて、かどばった岩ばかりとなり、ところどころ、残雪もでてきた。とある岩塊をこえ、頭を上げたとき、ほくは思わず、アッと叫んで、自分の眼をうたがった。今まで、この尾根の奥は見えなかったが、急に視界が開けたとき、はるか左手奥に、ものすごい様相の山がそびえていた

(図3)。2本の角を持ったような、奇怪な針峰だ。その角を結ぶ稜線から下は、すっぱりと切れ落ちた絶壁になっており、暗くかげをおとしている。絶壁(おそらく数百 m あろう)のどん底には、急な、雪溪とも氷河とも見える雪田が横たわっている。ウェリントン島全体が、氷蝕によって、なだらかな岩山となっているところに、ぬっとつき出たこの針峰は、恐ろしいほどの威圧感を持っていた。ちょうど、こうもりが、黒い翼を拡げて、まわりを見おろしているようにも見える。岩田君も、立ちどまって、じっと見入っている。2人は、まさに「探検」そのもの、地理学的発見そのものを、じっとかみしめていた。たかが 1500 m 位の山ではある。が、心は高鳴り、足はくぎづけになった。針峰の前景には、2つの、高さの違う氷跡湖が、落差 200 m はある滑滝によってつながっている。ほくたちの登っている尾根は、ここからは、やや細くなり、雪をかぶった、大きなドーム状の山で終わっている。

気をとりなおすと、2人には自然と、同意ができていた。尾根をつめて、そのドーム山までは行こうと。午後3時。まだ早い。この付近は、夏の今は、午後10時すぎまで明るいのだ。尾根は、雪があちこちに残っているが、どうということはない。長靴でじゅうぶんだ。やや急な雪面、はじめて人間に踏まれるであろう雪面を、もぐりながら登る。純白な雪だ。北アルプスの残雪のうす汚れたさまを見なれたほくたちには、異常に白くみえる、長い岩尾根が、また続く。近いようで、なかなか遠い。最後に、急な岩のガラ場を切り切ると、ダダッ広い頂上だ。高度計は 1300 m を示している。低くとも、処女峰は処女峰だ<sup>44</sup>。ちょうど6時。エデンとのトランシーバー交信の時間だ。寺本巖氏の声が入る。ほくを呼んでいる。ウェリントン島奥の怪峰の発見、1300 m 峰初登頂を報告するが、どうも声がうわずってダメだ。「何を言っているのか、わからん」と寺本氏。ま、いいや。帰ってからの楽しみだ。早々にスイッチを切り、改めて、360° のパノラマを、味わい

<sup>44</sup> プエルト・エデンの裏山に登ったという地元の人たちの話は全くきかず、私たちは当時少なくともそう思い込んでいた。未だに確認はできていない。



つつ眺める。

東方は、眼下にメシエル水道が、陸地や山に囲まれて、湖のように見えている。そのむこう、大陸側は、1000 m 前後の岩山と、それらの間に、散りばめたような小さな湖の群。さらに東方には、パタゴニア南氷陸が、明るく、くっきりとスカイラインを作って見える。氷原につき出た、ラウタロ山塊、マリアノ・モレノ山塊、岩田君らが目指しているリソ・パトロン山塊、巨大なピオ 11 世氷河の源、澄んだ空。氷陸のむこうには、アルゼンチン側の山々。その中に、ひときわ高く、大砲のたまを立てたように、黒々とそびえている、有名なフィッツ・ロイも見える。北方には、まさに例の 3 本ピークとその急な氷河。それをまさに呑み込むように口をあけている、「お釜」湖。西から南、ウェリントン島内部は、完全に氷蝕をうけて、低く、なだらかにみがいたような山なみがひろがる。入りくんだ岩尾根と、U 字谷。そのあらゆる谷底は、大小の湖をたたえ、尾根と湖、湖と湖は、白い糸のような滝でむすばれている。暗く、深く、かくれるようにある湖には、氷を浮かべたものも多い。深い谷のいくつかは、太平洋から奥深く入ってきたフィヨルドのどんづまりだ。そして、例の針峰が、ひときわ高く、それらすべてを見おろすようにそびえている。かつてこのウェリントン島一帯が、大氷原におおわれていた時代、あの針峰だけが、氷原上に、ヌナターク<sup>\*5</sup>のごとく、とび出していたのだろう。ぼくたちは、氷河時代の、壮大な遺跡を発見した考古学者の感慨のようなものに取りつかれていた。やっぱり、苦労して来てよかった。岩田君とぼくとは、高校時代から、一緒に山登りをしながら、単なる山登りではない、もっと「血湧き肉おどる」探検はできぬものかと迷い、悩み続けてきた仲だ。2 人は、それぞれ別々の、目的も異にした探検隊に属することになった。が、ふしぎなくらい、行くところは一致してしまった。これからのことを考えた。岩田君は、あの氷陸を横断して、アルゼンチンのパンパへ。ぼくは、氷陸からの氷河地帯と、このウェリントン島の奥へ、さらに太平洋岸へ。が、南

米最南部のこの地への憧れからやってきた点では集約されていた。

「俺、もうこれだけで充分や」。彼は言った。ぼくも、同じ気持ちだった。

ぼくたちは、大きな満足と幸福感にみたされて、下山の途についた。

## 湖を調べる

12 月 25 日。クリスマス。ポストの人たちと、肩を抱きあって、「<sup>メリ</sup>クリスマス<sup>ス</sup>！」ゴンザレス先生の奥さん、ベルタおばさんから、ぼくたち日本人 11 人に、パンケーキのプレゼント。さっそく 12 切れに分けて、大の男 11 人の、大じゃんけんだ。お祝いに集まってきた、付近の漁師や子供達が、びっくりして取り囲み、眺めている。今日は、みな 1 日中、ビーノを飲み、羊をくって馬鹿さわぎパーティをやるという。ぼくは、ふと、日本の「良識派」が年末近くなると、すました顔でよく言うことを思いだした。

「日本人は、クリスマスだといっっては、信仰もないのに、酒をのみ、バカさわぎをする。しかし、ほんとうのキリスト教国でのクリスマスは、実に静かなものだ。各家庭で、敬けんにキリスト生誕を祝い、祈り、……」。が、ここチリは、敬けんなカトリックの国だ。キリスト教国の墮落か、それとも、「良識派」特有の西洋崇拜か。

これから今日 1 日、みな楽しくやろうという時に、ぼくは、井上民二(ブンヤ)と伊藤隆の湖沼調査を手伝うために、重荷をかついで出発する。ぼくたち 3 人を、奇異と同情の眼が送る。ぼくたちの探検は、各隊員、すべてちがった調査目的を持っている。が、こういう困難な地では、お互いに協力してやってゆかねば、何もできない。湖沼調査はブンヤの担当だが、ぼくは興味がないからと言って、非協力的であることは許されない。ぼく自身のテーマ(古地磁気学調査)をやりおこせる為にも、協力せねばならない。ギブ・アンド・テイクの精神だ。なにもこんな日に……と言いたくもなかったが、あくまで調査をやりおこせよという彼の意志をそぐようなことは、やはり、できない。

<sup>\*5</sup> nunatak. 氷原・氷床に突き出た峰。グリーンランドのエスキモー語が語源。



目的地は、プエルト・エデンのすぐ裏の、奥行 8 km の、細長い氷跡湖だ。ゴムボートでアラカルフェ川を渡り、湿原を横切り、湖畔につく。ポストから約 1 時間だ。が、この湖は、湖沼調査には大きすぎる。もっと、ずっと小さい池が、ちょっと奥まったところに、この親の湖からくびれて、ひっそりとあった。親の湖との間の台地にテントを張り、調査開始だ。いったん自然の中にもどると、やっぱり楽しい。ゴムボートで池の一番どまん中あたりで、おもりを投げ込み、ボートを固定させる。水深、透明度、層別の温度を測定し、採水する。プランクトン・ネットを引く。不安定なゴムボート内で、重い採水器を上げることほどしんどいものはない。1 ラウンド 1 時間はかかる。それを徹夜で、2, 3 時間おきにやるのだ。ぼくと伊藤は、それでも、交互に作業をやるが、ブンヤは、毎回乗り込んでやらねばならない。

夕方、海の方から、汽笛がきこえる。「アギラ」号が、プンタ・アレナスから戻ってきたのだ。トランシーバーを入れると、井上治郎(ジロー)隊員の声。エデンにたちよった「アギラ」艦上からという。かなり酔った声だ。羊の肉を 2 kg も食ったとか、ビーノぜめでまいったとか、艦上でまた飲まされているとか、わあわあわめく。「うるさいなあ！」静かな湖畔での、落ついた気分から、急に、「騒がしいクリスマス」に呼びもどされ、興ざめだ。

夜。三日月と、満天の星。ひし型の南十字星。月光が湖面に映え、さざ波にくずれる。全く静かだ。ショパンのノクターンを想いだす。やっぱり、クリスマスはこの方がいい。

翌日、昼頃まで観測をやり、打ちきった。

池は、周囲はせいぜい 500 m 位だが、水深は 30 m。気温 16.5°C、表面水温 17°C、底の水温 5.5°C。

午後は、親の湖を、奥へ探検する。この湖は、誰ともなく、エデン湖と呼ぶようになった。細くつき出た半島の砂原に荷物をデポする。湖のさざ波によってできるきれいな汀線が、白い砂浜に縞模様に残っている。全くゴミのない、踏むのも惜しいほど美しい砂浜だ。

エデン湖を、奥へとこぎ入る。逆風で、軽いゴムボートは容易に流され、なかなか進まない。1 時間半後、最奥の、上流からの川が流れこんでいるところにやっつく。滝の音がする。奥まわって見えない。適当なところからヤブこぎをして、小さな尾根にはいより、滝を見る。滝というより、ものすごい激流だ。すぐ奥に上の湖がある。森林をぬい、パツと荒地のような斜面に出る。それにしても、ふしぎなのは、ずっと踏み跡らしき道がある。アラカルフや漁師はここまで入ってくるだろうか。このエデン湖では、全く魚の影が見えない。魚が目的ではないとすると、猟か。それとも、道らしきものは、けもの道だろうか。わからない。

上の湖に出る。奥はぐっと南へまがって見えない。あの針峰は、地図によると、この谷をつめた源流にある。近づくには、ゴムボートをかつぎ上げ、こぎつめるか、この谷の南に走る稜線をとおるかだ。やってみたい。

帰途は順風ではいい。ブンヤは、プランクトン・ネットを流す。うじゃうじゃいる。こぎ手を交代する際、うっかり重心がかたより、危うくボートが引っくりかえりそうになる。兩岸はずっと岩ぺきだ。こんなところで引っくりかえれば、おしまいだ。

## プエルト・エデンに生きる人たち

1968 年 12 月 31 日。エデンの人たちも、新年を迎える準備をはじめた。昼前、新しくやってきた通信下士官、ゲレロ氏が、NHK の海外向け放送をキャッチした。ちょうど、「紅白歌合戦」をやっている。日本は 12 時間早く新年を迎えるのか。「夜明けのコーヒー……」などとやっている。こんなところで、ピンキーがきけるとは思わなかった。日本人一同感激して、しばし無線機をかこむ。が、すぐ雑音にかき消されてしまった。昼頃、六甲隊の連中やジローは、すぐ近くの砂浜に塩干狩に出かける。浅黒くて、ハマグリ大の、アルメハという貝がいくらでもとれる。30 分もたたぬうちに、バケツ 2 杯ほども持っかえる。今日は、ポストの人たちは、夜の新年パーティの準備





に忙しい。昼めしは、この貝を焼いたり煮たりしてくう。ちょっと甘味があつてうまい。今は産卵期か、卵を持っている。ポストの人たちは、「それはまずい」と顔をしかめて、食わない。

午後、リオ・アラカルーフエの河口へ、ポストのボートで水くみに行く。ふだん、ポストは、まわり一面の湿原に溝を切って、ありあまるほどの水を集めている。が、ここ10日ほどの異常な晴天のため、すっかり水量が減り、集水用ドラムカンも空っぽになってしまった。おかげで、このところ、毎日誰かが水くみ航海をやらされる。今日は、プラクティカンテのファン、先日ゲレロ氏と一緒に、定期船「ナバリノ」号でやってきた、トロー氏の息子、六甲隊の松永公雄氏<sup>\*6</sup>とぼくの4人だ。エンジンつきのボートで、急流のまま海に入っている河口へのり入れる。流れがきつい。エンジンをかけたまま、しかも、ローブを、河口の上におおいかぶさっている木にかけて、ボートを固定する。ビーノの5 lビンに20本ほどくみあげる。が、5 lビンを流れの中に保持するのは、しんどい。腕に力が入らなくなる。流れの中を見ると、表面の、川からの流れと、下層の流れの方向が違ふ。下層にある浮遊物は、表面の流れと反対方向にゆっくり動いている。真水の川水は上にあがり、重たい海水は、下にもぐりこんで、くさび形に層を形成している、いわゆる塩水くさびだ。

水くみが済むと、ファンは、そのままボートを、エデンの入江の入口にある小島、ドゥルセ島にむける。この島には、一家族が住んでいる。エデンの住民は、ほとんどが、チョルガとりと、漁撈にたよっている。が、この一家は、森林を焼いて、畑をつくらうとしている。いかにも開拓者としての意気にもえているような顔の住人。大きなからだ。元気そうな奥さん。それを物語るかのように、9人もの子供がいる。末は、まだ赤ん坊だ。今日は、その赤ん坊の病気を見にきたのだ。トタン屋根、木の板でかこつただけの、小さな、粗末な小屋に入る。うす暗い内部。まん中に、鉄のストーブがひとつ。ロウソクがぼんやりと、室内を照らし出している。こんな小さな小屋に、十何人も、

どうやって寝るのだろう。医者ファンは、おもむろに診察カバンを開け、赤ん坊をみる。お腹が悪いらしい。今日のファンは、自信がなさそうだ。というのも、本もののドクター、松永氏が横にいるからだ。松永氏とて、国家試験を通つたばかりの新まえだが、いわば準医師のプラクティカンテから見れば、一段上になる。ファンは、しきりと松永ドクターに相談する。松永氏もほくも、未熟なカステリャーノ(南米人は、自国語としているスペイン語をこう呼ぶ)のため、大部分はわからない。が、松永ドクターは、医学用語だけはたくみにききとって、了解する。彼の診察では、単なる下痢だが、栄養不良だという。主人の顔には、本ものの医者に診てもらえたという、安心感がうかがえる。ファンが薬を与えて、「ムーチャ・グラシア」。薬をもらっても、主人は金が払えない。彼は開こんしたばかりの、猫のひたいほどのところに、野菜を栽培している。レタスをカートンボックス一杯にもらう。奥さんは、ぼくにきれいな三色スミレをくれた。

ふと気がつくと、まわりはもう、薄やみにつまれている。ボンヤリと灰色のヴェールをかぶつたような、海と空。その中に黒い影となつて、くっきりと輪郭の浮かびあがった、大小の島々、森、岩、コイウエの、曲がりくねった枝ぶり。異常に近く、そして白く浮かびあがって見える、山と氷河。世界のはての、寂しい、年の暮れだ。しかも、このやみの中に、へばりつくように、人間が生きている。ぼくは、無性にうれしくなった。地球と人間に、心からの愛着を感じる一時だった。

やみの海に、ボートを出す。今度は、となりの島に向う。すっかり夜になってしまった。ゆっくりと、手さぐりするように進む。犬のはげしい鳴き声をする。ボートが来るのを察したらしい。海岸にポツンとある小屋から、1人の少女が飛び出してくる。ファンを待っていたようだ。ロウソクの灯がさびしくついた部屋に通される。荒布のようなものでしきられた、まっ暗なとなりの部屋から、女の人の声をする。病気で寝ているようだ。今いるのは、女の子と2人だけ。男はどこへ行ったのか。多分、漁にでも出かけたのだろう。病気の母親と女の子1人で、正月もなからう。帰

<sup>\*6</sup> 当時神戸医科大(現神戸大医学部)医師。現在、兵庫県健康管理センター医師。



りがけ、ファンが言った  
「アスタ・アーニョ・ヌエボ」  
よ い お 年 を

もなにか、むなしくひびいた。

「さあ帰ろう」と言うのと、「ちょっと待て」とファン。これから、ウェリントン島の、ポストの沖につき出た半島ぞいの家を、一軒一軒まわって帰るという。えらい水くみになってしまった。へたすると、年が明けてしまうぞ。点々と続く、各小屋の明りの前ごとにボートはとまる。「ほんのちょっと」と言い残して、ファンは小屋にかけ込む。各家に足らぬ物資を届け、病人の具合をみて帰ってくる。帰りに、卵や、生きた鶏をかかえてくる。もう、ポストでは、年越しパーティが始まっているだろう。夕方の感傷はどこへやら、腹はへり、心はあせる。やっとポストに戻った時は、1968年も、あと20分で終わろうとしていた。幸い、まだ、パーティは始まっていない。発電機の調子がおかしく、電灯がつかないからだ。ゲレロ氏やトロー氏が奮とうしている。やれやれ。

## 地の果ての正月

年も明け、0時半頃、やっと、盛大なパーティが始まった。空軍の人4人、近くの漁師一家、たまたま立ち寄った漁船の乗組員、それに日本人11人。アラカルーフの女の子アンナ。総勢24,5人だ。スープ、サラダ、じゃがいも、羊肉のアサード(焼肉)、ビーノ、ピスコ(ぶどう酒のしょうちゅう)、パイナップルのかん詰等々。さっそく、ビーノで「サル<sup>乾杯</sup>」。

いいかげん陽気になったところで、日本対チリの歌合戦がはじまった。こちらは、やけに軍歌が多い。チリ側は、「リオ・リオ」という美しい民謡を教えてくれた。チリ版「赤とんぼ」だと誰か

が評したほど、日本人好みの、哀調をおびたメロディだ。

飲むほどに、酔うほどに、今度は踊りたくなる。テーブルをすみに押しやって、アコーディオンの伴奏で、ダンスがはじまった。チリ人は、みなダンスが好きだ。ところが、日本人で、ダンスのたしなみのあるのは、中島暢太郎隊長1人。思わぬところで、一同差をつけられた。が、負けじと、ぼくたちも、酔いにまかせてペアをくむ。知らぬ者同士の踊りに爆笑がおどる。かまうものか。アラカルーフのアンナ(15歳)と組む。うまい。ふっと、日本の女の子と踊っている錯覚にとらわれる。似ている。彼女が河原町を歩いても、異民族と思う者はないだろう。

やがて、クエッカ<sup>\*7</sup>の軽快なリズムに乗って、ハンカチを使つての、急テンポの踊りが披露され、パーティはますますにぎやかになった。1人の漁師は、酒と熱狂の余り、心臓マヒを起して倒れてしまった。夜が明け、やっとパーティは終わった。

昼すぎ、起きて食堂に行くと、すでに、付近の男たちが集まって、ピスコとパイナップルかんづめのカクテル(ピスコ・コン・ピーニャ)に酔い、ワイワイ騒いでいる。食って飲んで、さわいで。男たちの話題もつきない。漁のこと、他のエデンの住民のうわさ話。プンタ・アレナスの話。きくと、ぼくたち日本人の、時ならぬ大量訪問も話題にあがっているに違いない。

1日中、はめをはずして、飲み、語りあう。エデンの正月は、日本の、どこにでもある正月とかわらない。

<sup>\*7</sup> Cueca. チリを代表する民族舞踊・音楽。

